

# ポルトガル語の接続法とその習得

鳥越慎太郎

## 和文要旨

本論文は第二言語学習者によるポルトガル語接続法使用、及び習得を学習者コーパスデータに基づいて記述していくことを主たる目的とし、接続法習得の全体像の詳細な記述に加え、4つの研究小設問を挙げて考察していく。これに先立って、主にスペイン語学における最新の接続法研究や、対照言語学や言語類型学における叙法とモダリティの研究の成果を援用し、ポルトガル語接続法についての再考察を行う。

第1章ではまず、習得研究に先立ってポルトガル語の接続法について確認する。接続法は主に特定の表現における従属節内で用いられる動詞の叙法であり、現在、未来、(未完了)過去、及びそれぞれの完了アスペクト形式からなる。ただし、接続法未来は接続法現在の未来時制としては機能しておらず、それぞれ非過去時指示の異なる表現において用いられる。そのため、筆者は両形式が非過去時指示の別形式として定義されるべきであると主張する。接続法各形式は、構造的には特定の名詞節、副詞節、関係詞節、そして一部の主節表現や定型表現において用いられる。また、意味的には願望・希求の表現、命令・使役の表現、目的の表現や、疑いの表現、条件の表現、そして譲歩の表現や感情の表現など、多岐にわたる表現で用いられる。これらの多様な表現の共通性を見出し、接続法選択の定義を定めるために、Terrell and Hooper (1974) 以来、主にスペイン語学において、今日に至るまで様々な仮説理論が提案、議論されている。

第2章では接続法の意味的側面からの考察を発展させて、近年の一般言語学における叙法とモダリティの研究の観点から考察していく。現代ポルトガル語の文法書や教材では、接続法は形態論的視点から直説法と二項対立を形成する動詞形態素の最上位区分として扱われるのが一般的である。これに対し、近年の叙法とモダリティの研究成果に鑑みると、

接続法は直説法未来や過去未来、法的意味を持つ動詞語彙、副詞語彙や発話イントネーションなどとともに、非現実性 (*irrealis*) を表現する一形式に過ぎないととらえられる。さらに、主に日本語文法において提案され、近年和佐 (2005) によってスペイン語文法にも導入されている、「発話・伝達のモダリティ」と「命題めあてのモダリティ」からなる二段構えのモダリティ体系から考えると、接続法は命題めあてのモダリティを受ける命題内での *irrealis* のマーカーとしての、極めて限定的な機能しか持たない形態素であることがわかる。そのため、本論筆者は直説法との対等な二項対立は成り立たないと主張する。また、モダリティを表現するための複雑な表現体系は、学習者にとって非常に困難であることが想定される。

第 3 章では、第二言語習得研究における接続法習得研究をレビューしていく。第二言語形態素習得研究において、接続法をはじめとする叙法の習得研究は、時制形式の習得研究と比較すると圧倒的に研究事例が少なく、2000 年代になってスペイン語習得研究においてようやく盛んになり始めている。加えて、ポルトガル語やフランス語の接続法習得研究も 2010 年代になってわずかに事例が確認されるようになった。各接続法習得研究は方法論的に多様であり、結果を直接的に比較することはできないが、留学など目標言語環境での生活経験の習得への強い影響、願望・希求の表現や時間や条件の表現における接続法の習得しやすさ、関係詞節表現や感情表現における習得の難しさが複数の研究によって報告されている。一方で、疑いの表現での接続法の習得のしやすさについては結果が分かれている。また、一部の研究では接続法各形式と直説法未来・過去未来の混同を指摘するものもある。さらに、レビューする先行研究はスペイン語接続法習得研究が主であるため、現代ポルトガル語では日常的に用いられるものの、現代スペイン語では使用されなくなっている接続法未来表現の習得についての研究が見られない。

第 4 章では叙法とモダリティ、及び接続法習得研究の一部結果を受け、接続法との混同が考えられる直説法未来と過去未来について考察する。現代ブラジルポルトガル語におい

て直説法未来と過去未来は分類的にも機能的にも時制として扱われるのが一般的であるが、ポルトガル語やスペイン語では叙法として扱われた歴史があり、現代スペイン語では 1980 年代頃まで論争があった。個別言語文法を離れた意味論の分野では未来時指示と *irrealis* は二面的、連続的なものとして扱われることがあり、本論では両形式を時制とするか叙法とするかの議論は保留するが、モダリティを表現する形式として扱う。なお、直説法未来と過去未来の習得研究は接続法習得研究よりも少なく、そのほとんどが *irrealis* 形式としてではなく未来時指示形式としての習得を扱っている。

第 5 章では、先行研究結果を受けて副次的な研究設問を 4 点設定する。1 つは接続法習得順序を考察すること、2 つ目は接続法未来の習得を考察すること、3 つ目は接続法各形式と直説法未来・過去未来の混同について考察すること、4 つ目は日本人学習者の接続法習得について考察することである。

第 6 章では本研究の方法論について詳細に説明する。本研究ではリスボン大学語学研究所が構築した *Corpora do Português como Língua Estrangeira (PLE)* とコインブラ大学一般・応用言語学研究所が構築した *Corpus de Produção Escrita de Aprendentes do Português Língua Segunda (PEAPL2)* をデータソースとして用いている。両コーパスは共通の手法によって構築されており、被験者は *Common European Framework of Reference (CEFR)* に基づく自己評価によって、習熟度が客観的に評価されている。ただし、両コーパスでは被験者の学習者環境が異なるため、直接的な比較は行われない。両コーパスは筆者によって *TreeTagger* による品詞タグ付けがなされ、コンコーダンサーの *AntConc* を用いて分析される。分析によって接続法産出がリスト化され、さらに各産出形式に見出し語、時制、文脈、エラーの有無、産出被験者の母語、習熟度、作文テーマが手作業でコーディングされる。

第 7 章では接続法産出の詳細な分析結果を提示していく。まず各コーパス別に全体の産出を被験者の母語別、被験者の習熟度別、作文テーマ別にまとめ、続いて産出された接続

法時制を被験者の母語別、習熟度別に提示していく。続いて、Bento (2013) を参考にまとめられた 30 の文脈別の接続法産出を、表現別、被験者の習熟度別、母語別、表現によっては時制別、作文テーマ別に詳細にまとめ、実際の産出例を挙げながら考察していく。

第 8 章では各研究設問に対する量質的な考察を行っていく。接続法習得順序については、命令・希求、目的、反実仮想、譲歩、非指示関係代名詞表現において、初級から上級にかけて緩やかな習得の傾向が示された。また、願望・希求表現と条件表現は中級から急激に習得が始まり、一方で一般関係詞表現では中級をピークに上級での衰退が見られた。その他の大多数の表現では初級から上級にかけて産出の向上や、産出そのものがほとんど確認されなかった。

接続法未来の習得に関しては初級学習者から産出が見られ、中級学習者から急激に産出及び誤用が増えていくことが確認された。また、被験者の母語からの強い影響は確認されなかった。表現別に見ると、ポルトガル語教材で接続法未来が導入される際に題材となることが多い条件表現や時間表現における使用が多い一方で、関係詞表現や譲歩の定型表現にもやや産出が見られ、様態表現での産出はごくわずかであった。誤用面では、主節や名詞節での誤用や、反実仮想表現での誤用など、接続法未来表現を構造面や意味面で理解していないと思わしき例が比較的多く見られた。

接続法各形式と直説法未来・過去未来の混同については、直説法未来・過去未来が明確に求められるような文脈の定義が曖昧であるため、主に直説法未来・過去未来の接続法要求文脈への誤用についてのみ考察している。直説法未来・過去未来は適切な使用が多数を占める中、願望・希求の動詞補語表現や、時間の表現、非指示や一般関係詞表現など、接続法との混同が確認された。混同は特に中級学習者から多くなる傾向が見られた。また、ドイツ語、イタリア語、英語母語話者学習者など、全体の被験者数が多い母語話者集団に混同が多く見られた。

最後に、日本語母語話者学習者の接続法習得では、譲歩表現の産出が比較的多く見られ

た一方、両コーパスで全体的に産出が多い願望・希求表現や時間表現、条件表現の産出が少なく、反実仮想表現の産出は見られなかった。また、形式別には接続法未来の表現が比較的多いのも特徴的である。なお、習熟度別には上級学習者に産出が偏る傾向が見られた。ただし、分析コーパスにおける日本語母語話者サブデータが少数であるため、本論での日本人学習者分析は極めて限定的なものである。

第 9 章では結論にかえて本論のまとめと、本論の研究意義、並びに今後の課題について言及する。本論前半ではポルトガル語接続法の理解に一般言語学や他言語における研究成果を導入することで、従来の形態論的視点よりも広い視点から接続法をとらえ、個別言語内での議論や形態統語的議論では行き詰まっていた問題の解決を探る。ポルトガル語文法では等閑視されがちな叙法とモダリティの研究の観点から接続法が理解されることで、文法書や教材の内容の向上に寄与していくことが期待される。

また、本論は希少なポルトガル語接続法の習得についての研究でもある。接続法は学習者にとって最困難な文法事項であると同時に、その習得研究も他領域と比較して研究途上である。Bento (2013) のような数少ない先行研究や、後続の研究と比較、統合して、研究成果に厚みを持たせていくことで、学習者の視点から接続法の理解のしやすさ、しにくさ、混同しやすい他形式や他表現などを理解し、学習者目線からのシラバスや教材の開発、改善に寄与できることが期待される。